

リチャード二世

—— 映画文学人生論

W. シェイクスピア (1564-1616)

『リチャード二世』

『ヘンリー四世』 第一部 第二部

『ヘンリー五世』

『ヘンリー六世』 第一部 第二部 第三部

『リチャード三世』

いかなる人間もこの神聖な王笏に手をかけることはできぬ

プランタジネット朝エドワード二世の後継者は長男のエドワード黒皇太子の長子リチャード二世である。父と祖父が相次いで逝去したため、十歳の若さでイングランドの国王になった。

黒皇太子は百年戦争前期におけるフランスとの主な戦闘でほとんど勝利をおさめたが、スペイン遠征中に父王より早く病没し、国王にはなっていない。ランカスター公ジョン・オヴ・ゴント、ヨーク公エドモンド・オヴ・ラングレー、グロスター公トマス・ウッドストックなどは黒皇太子の弟で、リチャード二世の叔父にあたる。

若い国王にとって、叔父たちはけむったい存在だった。自分と年齢が近い側近にちやほやされているほうが気楽だ。しかし、側近政治は腐敗を招きやすく、国庫財政の破綻につながりやすい。叔父たち貴族からの批判と国民の不満がたかまる。

その頃、グロスター公は何者かに暗殺され、ランカスター公もリチャード二世の寵臣ノーフォーク公トマス・モーブレイに命を狙われた。

史劇『リチャード二世』は、ランカスター公の長男ボリングブルック（後のヘンリー四世）が、ノーフォーク公トマス・モーブレイを大逆罪で告訴し、国王の面前で決闘により黒白をあきらかにしようとする場面ではじまる。国王リチャード二世は決闘を中止させ、二人を国外追放にした。

リチャード二世

映画文学人生論

一応、喧嘩両成敗で、公平な裁きに見えるが、すでに高齢だったランカスター公が死ぬと、アイランド遠征の戦費にあてるという理由で、ランカスター公の財産を没収してしまった。国外に追放されていたボリングブルックは相続する法的権利がみとめられない。

百年戦争でフランス軍を相手に戦功のあったランカスター家がそこまで踏み付けにされてよいものか。ついにボリングブルックは打倒リチャード二世の軍勢のろしを上げる決断をした。

それに対するリチャード二世の立場はいわゆる王権神授説である。「いかなる人間もこの神聖な王笏に手をかけることはできぬ。おれにはよくわかっておるのだ、いかなる人間もこの神聖な王笏に手をかけることはできぬし、あえて手をかければ、冒瀆、窃盗、篡奪となることは」。

しかし、結果的には、ボリングブルックの軍勢が勝利をおさめ、王笏はリチャード二世からボリングブルックのヘンリー四世に渡された。

武力によって王座についたヘンリー四世には罪の意識があったらしく、「私は聖地遠征の十字軍に参加しようと思う、すみやかに私の罪の手から血を洗い清めるために」と言ったが、相次ぐ内乱への対応に追われて、聖地遠征の十字軍に参加することができなかった。

君(きみ)君たらざれば、臣(しん) 臣たらず